

地上に降りた女神たち

琴座の大志館

3章 「なみせん堂」の再建



vegagee

1. 「なみせん堂」の生い立ち

そのケーキ屋は、骨通り商店街から、路地を2本入ったJR常磐線の線路沿いに、道路を挟んで、向かい合うように建っていた。

ケーキ屋と言うより、明治時代にできた昔の工場といった感じで、煉瓦造りの壁に、古い両開きの木の扉が付いていて、その上に白い煉瓦の浮き彫りで、「なみせん堂」という看板が埋め込まれていた。

「こんにちは」、中に入ると、かなり広くて天井も高く、元は工場だったのがよくわかった。入った正面に3段のガラスのショーケースがあり、一番上にはサイズの違う丸いデコレーションケーキが4つと、ロールケーキが2本、真ん中の段には、それらをショートケーキにしたものが並んでいた。横の方には、喫茶店も兼ねているようで、4人掛けの丸テーブルと椅子が9セットも置いてあったが、お客も店員もいなかった。

しかたなくもう一度、呼ぶと、奥の方から、「はい」と女性の声がした。作業着姿で出てきた女性は、年齢も身長も信次と変わらない感じの、透き通るような肌の美人で、髪が短く、スポーツ選手のような感じの人だった。

「あの自分は、ベガ薬局の紹介で来ました、コンサルタントの異元信次と申します。責任者の方とお会いしたいのですが」信次がそう告げると、彼女は微笑んで、

「知ってます。タベ、竜子さんから、優秀な人を見つけたから、明日行かせるからって連絡をもらっています」

(大学出たばかりの人間を優秀って、館長もかなり、はったりを・・・) 信次がどう返答していいか迷っていると

「私が責任者の上野由黄です。といっても今、この店で働いているのは私だけなんですけど・・・」

2年前に、パテシエ養成の専門学校を卒業して、この冬まで銀座のケーキ屋で修行していたんです。

本当は、あと3年は修行を続けるつもりだったんですが、暮れに突然、父が心筋梗塞で倒れて、そのまま亡くなったんです。それまで母が喫茶室担当で、夫婦二人でやっていたんですが、すっかり落ち込んでしまって、今日も、まだ寝てるんです。

私が銀座の店を辞めて、2月から、このお店を再開したんですが、父の作り出していた味なんてとても出せないし、

お客さんはどんどん減っていつているし、私もうどうしたていいのかわからないんです。

お願い信次さん、助けてください」話しているうちに、つらかった事を思い出したのか、由黄は

信次に抱きついてきた。

先日、黒ヒョウに押さえつけられた体験はあったが、こんな美人に抱きつかれたのは初めての経験の信次は、

電信柱のように直立不動のまま固まってしまった。

そして、「だ、大丈夫です由黄さん。ぼ、僕が絶対立て直します」と言うのが精一杯だった。

「絶対、あのお店を立て直すんだ。そして由黄さんに笑顔を取り戻すんだ、そんでもって、彼女を幸せにしてあげるんだ。それができるのは俺しかないんだ」由黄の温かい体温と、ほのかな石けんのにおいを思い出しながら、信次は礼拝堂のピラミッド内で決意表明をした。

（はいはい、そう何回も言わなくても、俺も隣で見ていたんだから、わかるから）守護霊はうんざりした様子で、

たしなめた。

「見てたってどういうこと？盗み見していたのか？いくら守護霊といえどもそれは失礼だろ」

（あの世の世界から見れば、この世なんて、金魚鉢の中の金魚を見ているように丸見えなんだよ

。

信次の考えていることもな。それより、なみせん堂の経営状況を教えてくれないかな）

「わかったよ」

（言葉じゃなく心でイメージしてくれ、その方が早いから）

信次はできるだけ順序立てて、由黄が話してくれたことを思い出した。

明治時代、この近くに官営の毛布工場があり、そこの技師だった由黄の、ご先祖様が独立して下請け工場を作ったのが、「なみせん堂」の始まりであった。

関東大震災でもびくともせず、太平洋戦争で、徴兵された由黄の祖父が兵隊から帰って来たときも、

建物だけは奇跡的に焼け残っていたのだそうだ。早速、煉瓦炉を利用して、

水飴や大学いもなどを作り始めたのが、食べ物屋に転換したキッカケで、

さらにケーキ屋に転換したのは、スイーツ好きの父からなのだという。

そのため、土地や建物については借金は全くなく、ケーキを焼く炉や冷蔵庫等も減価償却はほとんど終わっているとのことだった。

（なるほど、それで由黄さんの腕前は？）

（主なケーキは一通りつくれるらしいよ、ただ味は普通だったな）

信次は試食したケーキの味を思い出しながら、イメージして見せた。

（そうか、それでライバル店の状況は？）

（えっとね）

信次は、由黄さんと、二人で試食した、駅前の老舗のケーキ屋の、代表的なケーキ。

線路の反対側のショッピングモールにある、大手ケーキチェーン店のケーキ。
その近くのスーパーや、コンビニのケーキの味と値段をイメージした。

（うーん、難しいなあ。老舗に対抗できる味が出せるようになるには、あと10年はかかりそうだし、

チェーン店のように種類を増やすことも、由黄さん一人じゃ無理だし、スーパーのように安売りにも走れないし。

これは何か別の付加価値を作り出すしか生き残る方法はないな)

（別の付加価値？）

2. 新たな付加価値

「あなた。起きてください」ショートカットの色白の美人に信次は揺り起こされた。

「おはよう由黄」信次はパテシエの服に着替えると、いつものように、由黄と二人で仲良くケーキを焼き始めた。

信次の焼くケーキは南千住界限どころか、今や全国的に有名で、飛行機に乗って買いに来る客も多いのだ。

妻の由黄は喫茶室も担当していて、夫婦で仲良く、この店を切り盛りをしている。

(なんて幸せなんだろう) そう思っていると、美人の妻が泣きそうな顔をして戻ってきた。

「あなた、お客さんがクレームを・・・」信次が振り向くと、由黄の後ろに、妹の美希と、館長の娘の舞が立っていた。

「よお、二人おそろいでどうしたんだ」

「どうしたじゃないでしょう。こんなまずいケーキ出して、あんた、お客を何だと思ってんの」舞は黒ヒョウに変身して襲いかかろうとした。

「信次兄さん。私もがっかりです」

信次は舞が突き出したケーキを一口食べた、それは腐っているようで本当にまずかった。

「どういうことだ」信次がとまどっていると、いつの間にか店の中にダンプカーが入ってきていて、

砂利を下ろすように、ケーキを降ろしはじめ、それが山のように積み上がっていった。

「うわ。夢か」信次が飛び起きると、パジャマは寝汗でぐっしょりだった。

ケーキ屋の店長、上野由黄から相談を受けて、もう三日も経つのだが、

あのお店のケーキに新たな付加価値をつける、いいアイデアがなかなか浮かばないのだ。

シャワーを浴びると、自動食事製造装置？で朝食を摂り、瞑想するため、

いつものように礼拝堂のピラミッドに向かった。

瞑想に入るとすぐに守護霊が現れた、

(どうだ、何かいいアイデアは浮かんだか)

(いや、なかなか難しいよ。夢の中じゃあ、おいしいケーキが簡単につくれるんだけどな)

(あの夢は、おまえの願望が入りすぎだよ。目を覚まさせるために、

美希と舞とダンプカーを送りこんだんだけど気に入ったかい) 守護霊はいたずらっ子ぽく微笑んだ。

(やっぱりお前だったのか！せっかく楽しく由黄さんとケーキを作っていたのに)

信次は昨日、由黄さんの手ほどきで、生まれて初めて自分でロールケーキを作った時の楽しさを思い出していた。

(あのなあ、霊界じゃあ簡単においしいケーキ作りを楽しめても、3次元じゃあ、あるていど修

行しないと

無理だからな。昨日うまくいったのは、由黄さんが、付きっきりで教えてくれたからなんだぞ。一人じゃあ、あんなに美味しいケーキを作るのは絶対無理だからな)

(今なんて言った?)

(3次元じゃ修行をしないと無理だと)

(いや、その前)

(簡単なおいしいケーキ作りを楽しむ?)

(それだよ、それ!お客さんに簡単なおいしいケーキ作りを楽しんでもらうんだ)

1ヶ月後、改装した(と言っても厨房と喫茶室との壁を取っ払い、ケーキのスポンジを並べるショーケースを増やしたぐらいなのだが)「なみせん堂」に美希と舞がやってきた。

パテシエの由黄が笑顔で出迎える。

「舞さん美希さん今日は忙しいなか、モニターを引き受けてくださってありがとうございます。最初から最後まで、手順を一通り流しますので、一番最後に駄目出しを、どんどんおっしゃってください」

結局「なみせん堂」は、お客さんが、自分たちでケーキ作りを楽しめる店として、新たな付加価値を付ける道を選んだ。

といっても大手のクッキング教室のように多くの講師を雇うことが難しいので、由黄さんが焼いた、

おいしい数種類のスポンジから好きの物を選んでもらい、そこに各自が好きなクリームを塗り、フルーツやクッキーなどをトッピングしていくスタイルのお店にしたのだ。

今日は、2週間後の新装開店に向けて、若い女性の目から改善点を洗い出してもらうために、舞と美希にお客様役として、来てもらったのだ。

信次はベガ大志館で使っているホテルのコンシェルジュの制服に身を堅め、今日のお客様接待の手順を、

今後入ってくるアルバイトの人たちのためにまとめて、マニュアルを作る役なのだが、美女3人に囲まれて、

仕事が全く手につかなかった。

由黄さんが、信次の方を見て微笑んだ。

(これは、この前見た夢が正夢になるかも・・・)

棚に寄りかかって、由黄さんに優しく揺り起こされた夢を思い出していると、棚から組み立てる前のケーキ箱が大量に落ちてきて、信次の頭に当たった。

(いて。また守護霊のやつ!) 信次は思わず、上を見上げた。

3. 銀河鉄道999のエンディング

メガロポリスステーションで銀河鉄道999が出発の時を待っていた。

星野鉄郎の前にはメーテルが立っている。

「もう会えないのか」鉄郎になりきった信次が問いかける。

「私は時の流れの中を旅してきた女」メーテル（顔が由黄に見える）が答える
ジリジリジリー。発車のベルが鳴ると由黄（メーテル）が信次（鉄郎）にキスをして、999号
に乗り込む。

ポー。汽笛が鳴り、シュ、シュ、シュ、999号が動き出す。

「由黄ー」信次が汽車を追いかけて走り出す。

ゴダイゴのエンディング曲が流れ出す。

信次は曲に合わせて熱唱すると、今見たDVDをリプレイしようと、リモコンに手を出そうと
した。

（もういい加減にすれば）頭の中に守護霊の声が聞こえた。

（うるさい！）最近は礼拝堂のピラミッド外でも、守護霊の声だけは聞こえるようになってきて
いた。

（あんたに、この切ない俺の気持ちがわかるものか）信次が頭の中でそう返事をする

（わかるよ、俺はお前なんだから・・・。おかげでさっきから10回も、銀河鉄道999のエンデ
ィング曲と

歌声が、俺の方にも延々と流れ込んできて、全く仕事にならないんだよ）

由黄さんが父親から引き継いだ、ケーキ屋「なみせん堂」の、新装開店は大成功だった。

2週間前に、モニターしてもらった舞や美希の助言を元に、フルーツや、かわいらしいトッピン
グアイテムを

充実させた上で、ミクシィやツイッターに、開店準備の状況から、こまめに情報を流したおかげで、

初日から予想を上回るお客さんが訪れたのだ。

店が活気づいたおかげで、寝込みがちだった由黄の母親も元気を取り戻し、

お店の看板娘？の一人として、活躍している。特に、年配のお客様からは好評のようで、

老人会のパーティーなどに手作りケーキを持って行きたい人たちの予約をバッチリつかんだのは
見事だった。

大盛況のまま初日が終わり、片付けも終わって、アルバイトの子たちが帰って、由黄さんと二人
っきりになった。

「信次さん本当にありがとう。あなたは私の救世主だわ。竜子館長が言ってたように本当にい

い人」

「そ、そうですか、そんなこと言われるとなんか照れるな。ありがとうございます」信次はさらに次の戦略を話した。

「半年ぐらいは、この方法で行けると思いますが、評判になれば、必ず大手が参入してきます。大手のケーキチェーンにお客さんを持っていかれないためには、今日見せたような、きめ細かい対応をブレッシュアップしていくしかないと思うんです」

「今日の対応？」

「そうです。年配客へのお母さんの対応は見事でしたし、男性客への由黄さんの対応もすばらしかった。

あとは女性客です。もちろん友達のように接した由黄さんの対応は文句なしですが、ここにボーイフレンド的な男性のパテシエが加われば最高だと思うんです」

信次は暗に、自分と結婚してくれれば、自分がその役を引き受けてもかまわないと、由黄さんの目を見た。

「そうね、早くしないといけないわね。女の私から言うなんてはしたないかもしれないけど、よし決めたわ、

私、彼にプロポーズしてみる。そしたら信次さん。もう一つだけ、お願いがあるの」由黄が信次の前で、

彼と言ったのだが、プロポーズというフレーズにのぼせ上がった信次には聞こえなかったようで、

「な、何でしょう？由黄さんの頼みならなんでもやりますよ」とプロポーズを受けるつもりで信次が胸を張って答えると

「ありがとう。そう言ってくれるとうれしいわ。宗一郎さんがOKしてくれたら結婚披露宴をこのお店でやりたいんだけど、それも信次さんに総合プロデュースしてもらいたい」そう言った、

由黄の言葉を計っていたかのように、宗一郎と名乗る人物がお店に入ってきたのだ。

(確かに話してみると、宗一郎って人はいい人だったよ、でもね、だったら最初から、お店の再建も

宗一郎さんに頼ればよかったじゃないか)

(パテシエの修行で、パリに行っていて、急には帰れなかったんだろ？しょうが無いじゃないか)

(由黄さんも、由黄さんだよ、最後まで隠してるなんて・・・)

(あーあ、やだねー、男の嫉妬は。別に隠してた訳じゃないだろ?)

(どっちの味方なんだよ。僕の守護霊ならもっと慰めてくれたっていいだろう) 信次がDVDを再び再生しようとしたら、アニメのメーテルではなく実写のメーテル？が写った。

「うわ、館長」それはメーテルそっくりの天野川竜子館長で、テレビ電話として、連絡してきた

のだった。

「信次。いつまでサボってるの？次の仕事が入ったわよ。すぐに館長室に来なさい」
実写のメーテル？はアニメと違って厳しかった。